

レポ ー ト



イギリスにおける1887年の「大学拡張」の熟議

全日本大学開放推進機構 理事長 香川 正弘

1. 熟議の始まり

最近、文部科学省は教育問題で熟議カケアイという集会を地方で開くことを進めている。本機構に加入している富山大学と兵庫大学もこの7月に催されたので、身近なこととなった。過去に実施された地方大学での熟議の内容も読んだことがあるが、いまひとつ熟議という集会の意味がよくわからなかった。熟議とは一体何なのか、適切な説明はないかと思って探していると、本年6月20日に広島修道大学が大学のホームページに、「熟議とは、多くの当事者による「熟慮」と「議論」を重ねながら政策を形成していくことです。具体的には、①政策を形成する際の多くの当事者が集まって、②課題について学習・熟慮し、議論をすることにより、③互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、④解決策が洗練され、⑤個人が納得して自分の役割を果たすようになるようなプロセスのことです」⁽¹⁾と説明がなされていた。この定義を読むと、熟議の意味がよく理解できた。

マニフェストという言葉がイギリスから来たのと同じように、これもイギリスから渡ってきたのであろう。英語での表現では、たぶんミーティングがこれに相当すると思われる。大学拡張運動を研究しはじめたころ、どのようにしてイギリスではこの運動が各都市に広がったのだろうかというのに興味を持って調べたことがある。民間の運動の運動たる所以がそこに見られるからである。その結果、1873年から75年にかけて、大学拡張を地方都市で始めるときにタウンミーティングというのを市長公邸で開いて、大学関係者、大学拡張の担当者、自治体関係者、学識経験者、聖職者、国会議員や市議会議員、それに一般市民も参加して意見を交換することがしばしばおこなわれ、決議をもって意思統一を図り取り組むことがわかった⁽²⁾。このような集会は、大学拡張運動を地方都市に導入する時だけでなく、運動の節目節目には、今度は大学拡張当局の主催のもとで、同じような集会が開かれてもから、すぐに似たようなケースを思い出すことができた。そうした集会のうち、1887年の場合が我が国の大学開放の熟議と大変良く似ているので、イギリスでの大学開放の熟議はどのような人が参加し、何を話し合っていたのか、見てみよう。

1887年のイギリスでは、同年3月9日にケンブリッジの大学拡張当局が、同年4月20日と21日にオックスフォードの大学拡張当局が、大学拡張を推進するための熟議を開いた。それぞれの内容は速記録をもとに次のような報告書に議論の過程が克明に記録されている。

○ケンブリッジ大学の場合

Report of a Conference on the Local Lectures of the University held in the Senate House, March 9, 1887. in *Cambridge University Reporter*, no. 678 (March 16, 1887), pp. 542-562.

○オックスフォード大学の場合

Report of a Conference in the Examination Schools, Oxford of Representatives of the Local Committees Acting in concert with the Committee of Delegates of Local Examinations Appointed to Establish Lectures and Teaching in Large Towns and of Other Interested in the Extension of University Teaching on April 20 & 21, 1887 (Oxford: At the Clarendon Press, 1887) .

1887年という年は、ケンブリッジが大学拡張を始めて14年目、オックスフォードが本格的に始めて2年目にあたる。イギリスの大学拡張の原理と運営原則はケンブリッジが定型化したことと、その内容については、既に本誌第4号に掲載した「大学拡張運動史家から見た我が国の大学開放の問題」のなかで提示したとおりで、それは19世紀を通じ大学拡張の広報パンフレットとして両大学で印刷し、広く全国に流布されたものである。従って、議論としては、原理原則の前提問題を問うのではなく、理念をどのように地方の都市や村落に浸透させていくかということが中心的なテーマになる。以下、熟議の内容を見て行きたい。

2. ケンブリッジ大学の大学拡張熟議

ケンブリッジの大学拡張で、大学人と地方の大学拡張講座参加者の熟議の最初は1875年にシェフィールドで開かれたが、それは大学拡張委員会と地方との会議であって大学主催で開かれた熟議は1887年ののが最初であった。ここでは大学拡張の学習の構造化と地方で推進していくための討議がなされた。

この熟議に集まったのは、副学長、カレッジの学寮長8名、大学の教授20名、現役及び元の大学拡張講師の大学人52名、教授の親族の女性及び女性招待者15名、地方の大学拡張センター代表52名、地方カレッジの代表を含めた他大学や学識経験者等19名が出席した。女性の参加者には、グラッドストンの娘、ニューナム・カレッジのクラブ等も含まれ、また他大学ではロンドン大学拡張協会からリボン侯爵外10名、オックスフォードから2名、シェフィールド、バーミンガム、ヴィクトリアの各大学から各1名が出席した。

参加者が討議した内容は8項目あった。

- 第1、上級夜間学校
- 第2、教育省による初等学校教員の講座修了証の認証
- 第3、小規模センターにおける科目群の教育的系統性を確保する問題
- 第4、受講生用図書の手配の方法
- 第5、講座が開かれぬ月の間の学習を奨励する方法
- 第6、地方カレッジへの政府補助金を求める問題
- 第7、地方センターを大学にアフィリエーションすること
- 第8、講師確保の恒久的基金の確保

問題提起を誰がするかというので議論の流れを見ると、大学人が行うのと、地方センターの側から行うのと2通りがあった。大学人が行ったのは次の議題である。第1議題では大学拡張委員会の事務局長ブラウン教授が問題提起をし、それを受けて教員、そしてダルウィッチ地方センターの代表が意見を陳述している。第4の議題は事務局のロバーツが提案し、ダルウィッチ、ロンドン大学拡張協会のリボン侯爵、スチュアート教授(大学拡張委員会委員)、ノッティンガム・カレッジの教授、マンチェスターとハルの代表が発言している。第5の議題では拡張講師が問題提起をし、ニューカッスルとイーストボーン地方センターから発言があり、カレッジの学寮長(大学拡張委員会委員)、そしてハートルプールの代表が発言している。第7の議題は、ウェストコット博士(大学拡張委員会委員)が問題提起をし、ニューカッスルの代表、大学人、オックスフォードのウィルソン、拡張講師、最後にノッティンガムのカレッジの教授が意見を述べている。第8議題は、ブラウンが問題提起をし、学寮長、スチュアート教授、リボン侯爵、ギルドフォードの代表、そしてバーミンガムのメイソン・カレッジの教授が意見の述べている。

地方センターからの問題提起は、第2議題と第3議題、第6議題に見られる。第2議題はハートルプールの代表が問題提起をし、ハルの代表、次いで拡張講師、ニューカッスル、リボン侯爵、シェフィールドのファース・カレッジの学寮長へと続き、最後にハルの代表が意見を述べている。第3議題では、ホーシャムの代表が問題提起、それを受けて教授、ダービーの代表、スチュアート教授、チェスター、サドバリ、ノーサンプトン、レーウィッシュ、ギルドフォードの代表、そして国会議員のロウントリーが締めくくっていた。第6議題では、ヒックス(拡張委員会委員)が問題を提起し、ブラウンが所信を表明している。

取り上げられた議題は、いずれも 1887 年の時代における大学拡張の課題を表しているが、議論における発言者を見ると、大学側が一方的に推し進めるのではなく、大学の管理運営者、大学拡張委員会委員、拡張講師、地方の代表とが、それぞれの立場で意見交換をしていることがわかる。特に実践現場にかかわる地方センターの代表からの意見には、問題点が具体的に提起されている。たとえば、第 2 議題で発言したハル地方センターのブレンマー嬢は、私はこんなにたくさん修了証を持っている、これをどうしてくれるかと、と詰め寄っているし、第 3 議題では、ホーシャムの代表アーノルドが協同組合との連携について積極的な意見を述べている。

スチュアート教授は、講座学習の継続性という観点と資金の確保について、目立った意見を述べている。すなわち、夏期講習会を開くことができないか、「大学拡張は今や全国で 2 万人が受講し、受講生一人当たりにかかる費用は 6 シリング 8 ペンスである」、このように安価に大学教育を普及させることができているが、大学拡張を安定させるためには中央と地方に基金を作る必要があると主張した。また、地方カレッジの教授からはアフィリエーション・スキームの実現の必要性和、大学拡張から地方カレッジが誕生しながら、実は大学拡張から離れている現状などの注目すべき発言もあった。

それぞれの議論の内容を吟味するスペースがここではないが、この熟議で議論されたことは、その後のケンブリッジの大学拡張政策に生かされることになった。スチュアートによる夏期講習会の提言、ロバーツによる地方センターごとの受講生会の組織化、教育行政当局による修了証の認可、継続学習の評価、地方カレッジへの国庫補助金獲得を求める提言等は、この熟議から実現されていくことになった。その意味で、熟議にふさわしい会議であったと言える。

3. オックスフォード大学の熟議

一ヶ月遅れでオックスフォードも大学主催で大学拡張の熟議を開いた。オックスフォードが大学拡張に参画したのは 1878 年であったが、事務局長アクランドのもとではほとんどうまく進まず、1885 年になって若干 24 歳の俊才マイケル・アーネスト・サドラーがその職に任命されて一挙に巻き返しをはかることになる。オックスフォードの大学拡張は 1884 年には氣息奄々の状態であったが、1887 年には地方センターが 79 センターも全国に作られた。熟議は再発足 2 年目のことだったので、盛り上がった。出席者は、副学長 1 名、カレッジの学寮長が 7 名、それにロンドンの主教、ウェストミンスター大聖堂の主任司祭、ラグビー校の校長パーシバル師、アクランド卿、国会議員 3 名等有力卒業生や教授等 29 名、大学拡張委員会委員 9 名、地方センターの代表 19 名、女性代表 18 名、それにケンブリッジからロバーツ、ロンドン大学拡張協会から 3 名、ブリストルの地方カレッジから学長、現役の拡張講師 7 名等、103 名が出席した。ケンブリッジの熟議と出席者が層が違うのは、大学改革や地方試験に功績のあった人、国教会の有力司祭、また協同組合代表が参加者に加わっていることであった。この構成はオックスフォードの過去の大学拡張にかかわりのあった人材と、現在の推進者たちをよく示しているものであった。

熟議は 2 日間にわたって行われた。第 1 日目は、オックスフォードの大学拡張についての基調講演はロンドン主教が行なった。事前に大学拡張に関する学則及広報パンフレットが資料として配布されていたと思われ(報告書の冒頭にこれらの資料は掲載されている)、主教はオックスフォードの実績と民衆の学習ニーズについて以下のように話した。

・実績

1885 年 4 月から 87 年 4 月までの 2 年間の実績は、次の通りである。58 の地方都市で 68 講座、延べ 509 講義を実施している。講座のうち 6 回講義は 43、8 回講義は 10、10 回講義が 15、12 回講義が 10、最終試験抜きの実験講座が 20 ほど開かれた。科目は、「歴史」が 198、「文学」が 191、「政治経済学」が 112、「自然地理学」が 48、「産業史」が 27、「芸術」が 20、その他で「労働者と福祉」に関する 6 回の通信講義講座が 17 都市で開かれる。

・ 学習ニーズ

教育を求めるニーズは非常に高く、学習ニーズの高まりは空前絶後である。これは初等教育が充実したことによるもので、特に農民よりも職人層にそれは強く認められる。職人、商人、マニユファクチャーたちは、最も高い教養教育を求め、かつ自分の仕事にも役立つことを学びたがっている。書物による独学には限界があり、有能の教師によるガイダンスと精神的に結びつく指導が必要である。大学拡張は大学ができる最大のサービスである。大学拡張は、我々が発足させた地方試験制度に教えることを加えればよいと思えばよい。

このように述べたあと、第1決議として大学拡張は「大学の義務」であることと、大学拡張を有効に実施する核を形成するために、拡張講師陣の中に拡張講師フェロー職を設けるという提案をした。この提案をめぐって副学長、タルボット国会議員、リボン侯爵等の意見陳述があった。副学長はこの決議を支持したうえで、大学拡張には知性と資金が必要であるが、「大学は学問を作るところであって、[そのための投資が必要であるから]学問を普及させるお金はない」(27-29頁)、また拡張講師は大学を表しているとも述べた。タルボット議員は、人々の知的渴望は大きく、労働者が受講のために苦勞している、オックスフォードの伝統は「汝が自由に受けたものは、自由に与えよ」ということがあるとあって、ベテランの拡張講師が安定して継続的に仕事ができるようにするべきだという意見を述べた。また一ヶ月前のケンブリッジでの熟議で、ウェストコット博士が、大学拡張の受講生が全国で2万人と説明したことと、スチュアートが夏期講習会の考えを提案したことを披露した。その後、リボン侯爵、クイーンズ・カレッジ、エクセター・カレッジ、ベイオル・カレッジ、キープル・カレッジの学寮長の意見陳述が続く。その中で重点志向すべきは労働者であるという意見が多くみられた。このような議論を経て、第2決議がクイーンズ・カレッジの学寮長マーグラス博士から提案され、大学がこうした事業を支援してくれることへの謝辞が決議された。

第2日目が本格的な議論で、第1日目が大学人の意見発表が中心であったのに対し、地方センターの代表たち3人が基調報告を行った。その基調講演に入る前に、議長のパーシバル師は、大学拡張を行うことは「我々の義務である」という点を強調し、この道を拓いたスチュアートのお陰であるし、自分たちもケンブリッジの先例についていくという決意を表明した。そして拡張講師を恒久的に雇用できるための基金の創設を訴えた。次いで、第1の報告は「地方都市で大学拡張教育を組織する最良の方法」についてロッチデールのケンプ夫人からの提案意見、第2の報告は「地方都市で大学拡張教育を有効に成功させるための各種の取り決め」についてタンブリッジ・ウェルのモーバリー嬢からの提案意見、第3の報告は「恒久的な基盤に基づいて都市に大学拡張をすることは地方の努力で可能なのか」についてバースのストザートからの提案意見であった。問題提起を大学側が行うのではなく、受講生代表ともいべき地方の代表にさせたところがユニークである。

第1の報告では拡張講座の受講生の分析が報告され、現在の主流は女性とジェントルマンの受講生が中心で、多くの団体が拡張講座と連携していることを述べ、労働者へのアプローチは別の仕方が必要であると述べ、現代は誰でも知識に接近することのできる時代になっているが、そうした欲求を社会全体に作り出していくことが必要であると締めくくっている。第2の報告では、実際に地方センターの経営を行った経験から、どのような業務をこなしているかが説明された。第3では、地方センターでは、受講生の獲得と構成、科目の選択、拡張講師、委員会と事務局長 保証金、基金など多くの仕事があり、自分には経験不足で考えられない、と前置きして、拡張講師の講義は正確な授業であること、受講生には教生が多いこと、事務局長の仕事内容について説明している。

これらの3つの報告を受けて全体討議が行われた。内容は、資金調達、労働者の立場からみた大学拡張講座、地方センターの運営委員会の構成、広報活動、女性や学校教師を対象にした講座の開き方、近隣センターとの協力関係、講座の開かれていない時期の継続学習の進め方、新設の地方カレッジの大学拡張、奨学金の提供、国庫補助金の必要性等について、活発な討議が行われた。

議論の過程で注目されるのは、労働者へのアプローチに関してである。マンチェスターのアボットは、労働者は大学拡張を支持していない、労働者には拡張講座は高価すぎる、と主張した。そして「思うに、我々が地域共同体と向上を目指している階級の中に教養ある人々を持ち込まないならば、大学拡張の原理など全く破壊される」(69 頁)と述べた。全体討議の最初の頃のこの発言は、その後の議論の方向付けをすることになる。サドラーの前の大学拡張委員会の事務局長を務めたアクランド(オックスフォード大学選出の国会議員)は、地方センターの運営する委員会に労働者を入れるのもいいが、別に労働者だけで構成する委員会を作るのはどうか、といい、拡張講師の W.H.ショーは、中流階級志向から労働階級志向に切り替えるべきだ、昨年度には自分の講座に 3500 人が出席したが、このうち正規の 8 回講義から構成される講座の平均出席者は、中流階級が 140 人、労働者が 340 人だった、広報の仕方に問題があり、協同組合を対象にすべきだ、と述べた(p.75)。また、大学のソロルド・ロジャースは、スチュアートと一緒に働いた経験を踏まえ、ロンドン大学拡張協会では初期の段階から労働者に働きかけたこと、労働者にアプローチするには基金を作る必要性を訴えた。ケンブリッジのロバーツは、大学拡張で大学は救われたのであり、これからは国民教育の一環としての役割を果たすべきであること、3-4 年間にわたる継続学習プログラムを確立することなどを提案した。熟議の最後に近く発言したストアブリッジから来た H.シェラード師は、自分はメカニクス・インスティテュートの活動に参加しているが、オックスフォードがこんなことをしているとは知らなかった、と述べ、地方でも裕福なジェントルマンを中心にして地方基金を作ることはできるといった。事務局長のサドラーは一言も発言の記録がなく、じっと静聴していたようである。

1887 年におけるオックスフォードの大学拡張の熟議は、再出発したオックスフォードの問題意識を知ることができる恰好な資料である。ここで確認された大学拡張は、大学の義務であること、ベテラン拡張講師を永続的に雇えるフェローシップ基金を創設すること、労働階級への志向性を高めることなどが、今後の方針として確立された。拡張講座の対象を労働者に志向するという事は、既にアクランド及びサドラーという新旧 2 代の事務局長により決定していたことであるが、それをこの場でも再確認したことになる。ベテラン講師確保のための基金は決議に基づいて直ちに基金になる資金 791 ポンドが集められ、同年にオックスフォードの最も高名な拡張講師ハドソン・ショー師がこのポストに任命された。スチュアートがケンブリッジの熟議で提案した夏期講習会は、上述したようにこの会議でも紹介され、オックスフォードはケンブリッジを出し抜いて、翌年には早くも全国から 900 人も参加した大規模なスケールで実施した。

本稿では、1887 年に開かれた、ケンブリッジとオックスフォードの大学拡張熟議の内容を見てきた。熟議の内容を見ると、大学拡張が安定して繁栄しているケンブリッジと、未経験ながらこれから取り組むオックスフォードの違いがよくわかる。両者の熟議の内容で関心の度合いが大きく違うところは、大学拡張講座の構造化と普及に関してであろう。ケンブリッジでは、受講生の継続学習をどのようにして進めるかということに関心があり、アフィリエイト・スキームで編成された 3-4 年間の継続学習カリキュラムを広げることに関心が強く、その目標は 1890 年代のエクステンションで学位取得が可能になるように道を拓くことに置かれていたのである。他方、オックスフォードでは、継続学習よりも拡張講座を普及させていくことが問題で、12 回から構成されるターミナル講座はいうまでもなく、アフィリエイト・スキームの問題すら議論されなかった⁽³⁾。むしろ、労働者を志向したいということから 6 回講義から構成される短期講座で普及を図ることだけに関心があった。この志向の違いと継続学習への取り組みの落差が、オックスフォードをして 1908 年のチュートリアルクラスの提言に繋がることになると思われる。

冒頭で引いた熟議の定義に照らしてみても、1887 年の両大学の会議は、どの点から観ても熟議の要件を満たしている集会であったといえる。最近開かれている大学開放の熟議の源もこんなところにあるのである。イギリスでの熟議は一切国が関与していない。我が国の場合は個別大学と文部科学省の主催で熟議が開かれる。国が関与する場合、地方の人々が納得するような、どのような具体的な支援策を提言しているのか、大学の学長は自分の所信をどのように表明しているか、また取り上げられる議題にはどのような内容があるのか、どのような決議がなされ、政府と個別大学の大学開放政策にそれらがどのような形で結実し実行されるのか、ぜひこれらの点に注目して熟議の内容を見たい。

注

- (1) 広島修道大学、<http://www.shudo-u.ac.jp/event/8a2171000001a97w.html>、平成24年7月30日。
- (2) 大学拡張運動を地方都市に導入するときの地方でのタウンミーティングに関しては、次の論文に実態が示されている。
香川正弘「一九世紀英国大学拡張の地方組織」梅根悟監修『社会教育史I』(世界教育史大系36巻)講談社、1971年、294-310頁(本文)、326-329頁(注)
同「十九世紀英国大学拡張組織の研究」『日本社会教育学会紀要』No.8、1972年6月、55-69頁。
同「ケンブリッジ大学拡張開設ための組織化」『上智大学教育学論集』第28号、1994年、1-69頁。
同「ロンドン大学拡張協会の発足」『社会教育・生涯学習ジャーナル』第2号、2009年、183-199頁。
- (3) 当時、ケンブリッジのアフィリエーション・スキームは、1881年に導入された時は新設の地方カレッジの学生がケンブリッジ大学へ編入して学位を取得できるようにするものであったが、1886年には大学拡張の受講生にもこれが適用されるようになった。このスキームについて、当時のオックスフォード大学の実力者ジャウエット師の反応は、下記の論文に紹介されている。香川正弘「イギリス大学拡張運動の初期段階における発展—大学拡張運動へのオックスフォードの参入」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第5号、近く刊行予定。

香川 正弘 (かがわ ・ まさひろ)

1942年、広島県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得中途退学、1987年「イギリス大学拡張成立史研究」で教育学博士(広島大学)。上智大学名誉教授。